

令和 2 年 6 月 27 日現在

機関番号：32621

研究種目：基盤研究(B)（海外学術調査）

研究期間：2017～2019

課題番号：17H04514

研究課題名（和文）中国朝鮮族の元日本留学生と東アジアにおける「越境的な社会空間」に関する研究

研究課題名（英文）A Study on Former Korean-Chinese Students to Japan and their "Transnational Social Space" in East Asia

研究代表者

権 香淑（Kwon, Hyangsuk）

上智大学・総合グローバル学部・助教

研究者番号：00626484

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、中国朝鮮族社会の形成における日本の影響の一側面を捉えるべく、朝鮮族の「元日本留学生」をキーワードに据え、東アジアにおける朝鮮族の「越境的な社会空間」を実態的に解明することを目的とした。とりわけ、朝鮮族の来日とコミュニティ形成の推移にもとづき、その歴史と生活戦略を調査分析した。その結果、中国の国費留学生派遣制度による一定数の朝鮮族大学教員と大学院生の来日が、日本の朝鮮族社会形成における端緒となったことが明らかになったほか、独自のエスニック・ネットワークを背景に、東アジアにおけるトランスナショナルなコミュニティの内実が実証的に把握された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は、次の二点に収斂される。第一に、世界のグローバル化に対応する形で強化されつつある各国の移民政策、とりわけ1990年末以降に顕在化した選別的な移民政策が東アジア諸国においても顕著であることから、移動性が高いエスニック集団として知られる朝鮮族（元日本留学生）の動向から、そのダイナミズムを把握しうる。第二に、朝鮮族の歴史や現状においては意識的に忌避されるか、自明なものとして看過されがちであった日本の影響に関する展望を得ることにより、近年、齟齬や軋轢が顕著な東アジア諸国間において、望ましい共生を模索するうえでの一助になるのみならず、東アジアにおける日本の立ち位置を捉え直す契機になる。

研究成果の概要（英文）： This study focused on “former international students to Japan” as the key concept and aimed to elucidate the actual situation of the Korean-Chinese “transnational social space” in East Asia to capture one aspect of Japan’s influence on the formation of the Korean-Chinese society. In particular, the study analyzed the history of Korean-Chinese international students to Japan and their lifestyle strategies on the basis of the transition of Korean-Chinese migration to Japan and community formation. Results revealed that a certain number of university faculty members and graduate students from the Korean-Chinese community landed in Japan under the nationally funded international student dispatch system in China. Additionally, the internal facts of the transnational community in East Asia were empirically inferred against the background of their ethnic network.

研究分野：地域研究

キーワード：元日本留学生 中国朝鮮族 移動 トランスナショナル 越境的な社会空間

## 様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

グローバル化による人の移動のなかでも、近年、その規模と動態のダイナミックさに注目があつまる朝鮮族のそれは、東アジアの動向を捉える際の一つの試金石となっている。これまで移動の把握の仕方を基準に、移動を取り巻く社会的環境や経済構造(外的要因)、移動者に埋め込まれた文化的特性(内的要因)、これらの外的/内的要因の両者が複雑に絡み合う連続から捉える多様な観点から研究が進んできたほか、移動対象の分析範囲や単位を基準に、移動先のホスト社会をめぐるコミュニティ、ホスト社会および出身元社会の両方を跨ぐ越境的な社会空間、そして移動元の農村地域の変化などを踏まえた研究も徐々に始めている。

研究代表者は、1996年以來、朝鮮族の移動研究に取り組み、移動と再移動、コミュニティ形成、家族の分散、親族ネットワークなどの論点を中心に、朝鮮族の移動をめぐる様々な研究課題を実証的に論じてきた。最新の共同研究では、日本の首都圏を中心に七つの朝鮮族団体の協力を得て実施した量的調査結果をまとめ、これまで在日中国人研究の枠組みのなかで論じられてきた内容とは異なる側面があることを指摘し、朝鮮族のコミュニティの変遷と定住化の特徴が、移動する文化および越境的な社会空間を背景とした「拠点形成としての定住化」であると分析した。

その結果、朝鮮族の「越境的な社会空間」の全体像を把握するためには、元日本留学生の「留学後」の動向に関する包括的な把握が不可欠であることが浮かび上がった。言い換えれば、元日本留学生が再移動(帰郷)もしくは定住先の社会において直面する親世代の介護、次世代の子女教育、言語問題を中心としたアイデンティティの維持と再構築といった論点に規定されるがゆえ、これらの個別研究が待たれると同時に、総合的かつ包括的な研究の必要性が指摘された。そこで、これまで聞き取りを行ってきた元日本留学生への追跡調査を含む研究課題として、彼女らによる越境的な社会空間の内実を把握すべく共同研究を構想するにいたった。

朝鮮族の出身地域である中国では、主に人口減少への対策を講じる研究が、約70万の朝鮮族を抱える韓国では、外国人労働者問題や韓国社会との多文化共生という側面からアプローチする研究が展開されてきた。一方、日本の朝鮮族は「見えないマイノリティ」ではあるが、留学ルートによる来日と定住化の傾向から、客観的研究を企画・実施しやすい環境にある。本研究の実施によって、中韓の研究者による関連分野における研究蓄積と、日本の研究者によって展開されてきた実証的研究の総合化をも目指すことが可能である。

### 2. 研究の目的

本研究は、中国朝鮮族社会の形成における日本の影響の一側面を捉えるべく、「元日本留学生」をキーワードに据え、朝鮮族の「日本留学後」と「越境的な社会空間」の実態的な解明を目的とした。具体的には、朝鮮族の来日とコミュニティ形成の推移にもとづき、留学後の移動と定住を方向付ける就職、結婚、育児などを踏まえた多世代に亘る調査を行いつつ、移動もしくは定住先での当該社会における位置づけ、日本留学との因果関係、人的資本、社会関係資本、文化資本の活用/非活用を決定づける局面および諸条件などについて考察を行うことにより、朝鮮族の「越境的な社会空間」を構成する諸要素への日本の影響を、実証的に明らかにすることが主眼であった。

### 3. 研究の方法

本研究では、中国朝鮮族の「元日本留学生」の移動と定住をめぐる動向の実態的な解明に向けて、中国・日本・韓国において現地調査と文献資料調査を並行し、調査結果は研究会および公開シンポジウムを開催することで社会的な還元を試みた。具体的な方法は以下の通りである。

(1) 文献調査としては、(1a)中国人の元日本留学生に関する先行研究を踏まえたうえで、朝鮮族の元日本留学生の特殊性と関連する制度・政策研究、(1b)文化資本を生かした朝鮮族の元日本留学生による活動や関連分野の研究を整理した。

(2) 質的/量的調査を適切に行うため調査の実施方法や組み合わせなどを検討し、それらを踏まえて聞き取り調査およびアンケート調査を行った。

以上を踏まえ、日本の影響をめぐる全体的な考察を行うよう段取りを整えた。

### 4. 研究成果

本研究は、中国朝鮮族社会の形成における日本の影響の一側面を捉えるべく、「元日本留学生」をキーワードに据え、朝鮮族の「日本留学後」と「越境的な社会空間」の実態的な解明を目指した。とりわけ、朝鮮族の来日とコミュニティ形成の推移にもとづき、①草創期(1980年代初～1990年代初)、②確立期(1990年代初～2000年)、③発展期(2000年以降)の3つに分け、研究分担者および研究協力者とともに、留学後の移動と定住をめぐる調査を行った。その結果、以下のような知見を獲得した。

第一に、草創期の調査では、延吉、長春、大連、青島、済南、煙台、長春の在住者への聞き取りから朝鮮族の来日に影響を及ぼした日本語教育の実態が把握されるとともに、日中国交樹立

による制度的な変化に伴い、極めて少数の訪問学者、国費・私費留学生在が来日したこと、とりわけ「大平班」の研修生が、「日本研修」（1981年3月）後、再度留學生、訪問学者等として訪日していたことが明らかになった。

第二に、確立期の調査では、中国に帰国したのち起業している元日本留學生の聞き取りを、北京、延吉、東京、千葉、名古屋、大阪で行い、日中両国における政策的な変化に加え在日朝鮮族社会の内部における変化が指摘され、それぞれ専門分野での活躍が確認されると同時に、団体活動への参加如何を問わず、各々がもつパーソナルネットワークを最大限に活用していることが判明した。

第三に、発展期の調査では、上海、ハルビン、東京、名古屋、大阪において元日本留學生の朝鮮族の日本留学の経緯、日本での勉学と仕事、留学を終えた後の帰国や日本在住の理由及び生活実態、そして彼らの子育てと子どもの教育をめぐる実態が浮き彫りになった。その特徴としては、日中間を移動する場合、家族単位での移動であることが多く、その際、移動する子供に豊かな経験と過度のストレスの両方を与えることが把握された。

本研究では、初年度（2017年度）及び次年度（2018年度）に、草創期に来日した国費留学第一期生および日本の文部省奨学生による講演会（2018年3月および2019年3月）を開催し、貴重な証言を得て事実関係の整理を行った。また、朝鮮族移住史研究の第一人者（中国延辺大学の孫春日教授）を招聘し、共同研究の中間的な総括として、国際シンポジウムを実施した（2018年10月）。さらに、最終年度（2019年度）には、共同研究の全過程において得られた知見を踏まえて補足調査を行い、年度末（2020年3月）には学術書（『中国朝鮮族の移動と東アジア：元日本留學生の軌跡を辿る』）を刊行することで、研究成果の社会的還元と発信を行った。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 鄭亨奎	4. 巻 88
2. 論文標題 中国朝鮮族の日本留学と日本語教育：元留学生を事例に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 研究紀要（日本大学経済学部）	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 権香淑・呉泰成・金雪	4. 巻 70
2. 論文標題 中国朝鮮族の移動と東アジア：元日本留学生の軌跡を辿る研究序説	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東アジア研究	6. 最初と最後の頁 47-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 趙貴花	4. 巻 7
2. 論文標題 元日本留学生の朝鮮族の国際移動と子どもの教育：転校をめぐる教育戦略と葛藤	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東アジア教育研究	6. 最初と最後の頁 22-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鄭亨奎	4. 巻 88
2. 論文標題 中国朝鮮族の日本留学と日本語教育：元留学生を事例に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 研究紀要（日本大学経済学部）	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 権香淑	4. 巻 8
2. 論文標題 中国朝鮮族の移動とコミュニティ研究における理論的課題：トランスナショナルな枠組みの批判的継承に向けて	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 朝鮮族研究学会誌	6. 最初と最後の頁 28-53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 権香淑・呉泰成・金雪	4. 巻 70
2. 論文標題 中国朝鮮族の移動と東アジア：元日本留学生の軌跡を辿る研究序説	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東アジア研究	6. 最初と最後の頁 47-61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 趙貴花	4. 巻 7
2. 論文標題 元日本留学生の朝鮮族の国際移動と子どもの教育：転校をめぐる教育戦略と葛藤	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東アジア教育研究	6. 最初と最後の頁 22-38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 鄭亨奎
2. 発表標題 中国東北地方における日本留学と日本語教育
3. 学会等名 第六回中日韓朝言語文化比較研究国際シンポジウム（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鄭亨奎
2. 発表標題 中国東北地方における日本留学と日本語教育
3. 学会等名 第六回中日韓朝言語文化比較研究国際シンポジウム(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鄭亨奎
2. 発表標題 中国東北地方における日本留学と日本語教育
3. 学会等名 第六回中日韓朝言語文化比較研究国際シンポジウム(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 権香淑
2. 発表標題 朝鮮族の日本への移動と東アジア
3. 学会等名 朝鮮族研究学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 宮島美花
2. 発表標題 朝鮮族と日本の留学政策
3. 学会等名 朝鮮族研究学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鄭亨奎
2. 発表標題 草創期における朝鮮族の日本留学
3. 学会等名 朝鮮族研究学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 趙貴花
2. 発表標題 近年の朝鮮族の日本留学と多様化する留学後の移動
3. 学会等名 朝鮮族研究学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 權香淑
2. 発表標題 朝鮮族の移動とコミュニティの変容から浮かび上がる理論的課題
3. 学会等名 朝鮮族研究学会2017年度全国学術大会午後セッション
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 權香淑
2. 発表標題 拠点形成としての定住化：日本における中国朝鮮族コミュニティの変遷過程
3. 学会等名 神戸華僑華人研究会創立30周年記念シンポジウム「グローバル神戸の越境力」
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 権香淑
2. 発表標題 移動する中国朝鮮族
3. 学会等名 新宿区立北新宿図書館講演会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鄭 亨奎
2. 発表標題 中国朝鮮族の日本留学と日本語教育：草創期を中心に
3. 学会等名 2017年「東アジアにおける日本学研究」国際フォーラム
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 趙 貴花
2. 発表標題 多文化空間に見る多文化共生：韓国ソウルの「同胞タウン」を事例として
3. 学会等名 第五回中日韓朝言語文化比較研究国際シンポジウム
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計8件

1. 著者名 権香淑、宮島美花	4. 発行年 2020年
2. 出版社 彩流社	5. 総ページ数 248
3. 書名 中国朝鮮族の移動と東アジア：元日本留学生の軌跡を辿る	

1. 著者名 宮島美花	4. 発行年 2020年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 101-121 (275)
3. 書名 多賀 秀敏、五十嵐 誠一編『東アジアの重層的サブリージョンと新たな地域アーキテクチャ』	

1. 著者名 宮島美花	4. 発行年 2019年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 107-136 (352)
3. 書名 佐藤幸男、森川裕二、中山賢司編『周縁 からの平和学』	

1. 著者名 宮島美花	4. 発行年 2017年
2. 出版社 国際書院	5. 総ページ数 246
3. 書名 中国朝鮮族のトランスナショナルな移動と生活	

1. 著者名 権香淑	4. 発行年 2019年
2. 出版社 彩流社	5. 総ページ数 384
3. 書名 〔増補新版〕移動する朝鮮族：エスニックマイノリティの自己統治	

1. 著者名 宮島美花	4. 発行年 2019年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 107-136(329)
3. 書名 第5章「トランスナショナル・リレーションズ研究としての移動・移民研究」佐藤幸男、森川裕二、中山賢司編『周縁からの平和学』	

1. 著者名 宮島美花	4. 発行年 2019年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 101-121(275)
3. 書名 第4章「サブリージョンと移民：中国朝鮮族の事例から」多賀秀敏、五十嵐誠一編『東アジアの重層的サブリージョンと新たな地域アーキテクチャ』	

1. 著者名 宮島美花	4. 発行年 2017年
2. 出版社 国際書院	5. 総ページ数 246
3. 書名 中国朝鮮族のトランスナショナルな移動と生活	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	宮島 美花  (Miyajima Mika)  (10452666)	香川大学・経済学部・教授   (16201)	
研究分担者	鄭 亨奎  (Zheng Hengkui)  (80253045)	日本大学・経済学部・教授   (32665)	

## 6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	趙 貴花 (Zhao Guihua)  (00624850)	名古屋商科大学・商学部・講師  (33914)	
研究 協力者	金 雪 (Kim Seol)		
研究 協力者	呉 泰成 (Oh Taesung)		